

I R（統合型リゾート）に関するグループインタビュー（札幌会場⑥） 議事録

日時：令和元年10月11日（金）18：30～19：30

場所：別館地下1階大会議室

〔道からの説明〕

（道担当者）

本日は貴重なお時間にお越しいただき、ありがとうございます。

この冊子は、I R、統合型リゾートとはどういうものかを知っていただくために、昨年7月に制定されたI R整備法に基づいて、一般の方々にできるだけわかりやすく理解を深めていただく主旨で作成したものです。内容は大きく分けて三部構成となっています。まずI Rとは何かというのが一つ。北海道にI Rを導入した場合にどういった効果があるかということが二つ目。三つ目としまして、I Rを北海道で導入した場合にどういった懸念や課題があるかを紹介する内容となっています。

まず1ページ目、そもそも統合型リゾート、I Rとは何かということですが、I Rとは国際会議場や大規模な展示場、ホテル、ショッピングセンター、レジャー施設など様々な施設とともに、それらを収益の面から支えるカジノを、公設ではなく民間の資金で一体的に整備し、運営する施設です。わかりやすく日本にある施設で例えると、東京ディズニーランドなどのテーマパークと、横浜市にあります大きな国際会議場のパシフィコ横浜のような施設とカジノを一体的に運営するイメージの施設となっています。

日本型I Rでは、会議場施設や展示場施設などは、かなり大きなものをつくらなければならないと決められています。また、こうした会議場や展示場以外にも、例えば日本の伝統文化の魅力を発信するような施設や、I Rに来たお客さんを北海道内の各地域、あるいは東北など日本各地に送客する機能を持つ施設を整備する必要があります。

続きまして、世界にはどういったI Rがあるかという事例を紹介させていただきます。ラスベガスという名前はお聞きになったことはあるかと思います。昔はカジノが中心でしたが、現在はホテルやエンターテインメント施設など様々な施設が併設されており、たとえばサーカスとアートを融合したシルク・ドゥ・ソレイユという団体のパフォーマンスや、セリーヌ・ディオーンなど、世界的なアーティストのコンサートが毎晩繰り広げられる、世界有数のエンターテインメントの街となっています。それ以外にも、世界最大級の家電見本市が毎年開催されるなど、アメリカの中でも有数の展示会、会議が開催される地域となっています。

続いて3ページ目に移ります。ラスベガスのようなきらびやかなI R以外に、自然や地域の特性などを活かしたドイツのバーデン・バーデンは、ヨーロッパでは古くからの温泉街としてよく知られており、多くの文化人や有名人などの社交場として栄えてきたところです。この街の中には、世界的に有名なオーケストラが演奏するドイツでも最大級のコンサート

ホールや美術館などがあり、街全体で I R のような地域となっています。

三つ目の地域は、家族 3 世代で楽しめる事例として、シンガポールにあるセントーサ島を掲載しています。国際会議場や展示場、ホテルなどの他にもユニバーサルスタジオ・シンガポールや水族館、ウォーターパークなど、幅広い世代の方々が楽しめる施設が整っており、外国人だけではなく、地元の方にも愛される施設となっています。

続きまして、I R にはどういったメリットがあるのか、仮に北海道に I R を設置した場合にどのような効果が現れるかをまとめたページです。直接的な効果としては、北海道に来る観光客をはじめとするお客さんの増加、また、これらの施設による税収の増加などが考えられます。私どもが平成 29 年度に実施した調査では、カジノのほか、ホテルや会議場などの施設を利用される方を含んだ I R 施設全体の訪問者が年間最大で 860 万人程度、また、こうした方々によってもたらされる税収の効果は、年間最大 234 億円程度見込まれるのではないかと試算しています。

カジノ収益等によってもたらされる納付金は、例えば、今北海道で二次交通の問題が話題になっていますが、こうした二次交通の充実や、外国語の看板、W i - F i などの通信施設の整備をすることによりまして、より多くの外国人に来ていただくような取組といった全道的な課題解決のための財源として活用することが期待されます。この試算は外国の事例などを参考に試算したものですので、実際に北海道が I R を誘致となった場合には、より具体的で精緻な試算をして、改めてお示ししていきたいと考えています。

続きまして、I R 誘致で北海道経済がどうなるかということです。I R はかなり大きな施設ですので、関連産業、直接施設で働く方々、また取引先での新たな雇用などが期待され、全体的に北海道経済に好循環をもたらすことが期待されます。先ほどもお話ししましたとおり、I R は民間の事業者が整備・運営することになっています。これまで北海道経済は公共事業依存型で、公共事業がないとなかなか経済が活性化しないという課題がありました。I R の設置を契機に民間投資が生まれ、良い経済循環ができあがってくるのではないかと期待しています。また、若年層を中心に、よりよい職場を求めて本州などに出て行く学卒者が多いのですが、新たな雇用が生まれることによって、こうした方々が道外に出て行くことを防止するとともに、道外に出てしまった方を道内に呼び戻す、U ターンの効果も期待できるのではないかと考えているところです。

続きまして 7 ページ目、なぜ I R にカジノがなければならないのかということです。この質問についてはよく他の方々からもいただいているところですが、I R 整備法で規定されているように、大規模で質の高い国際会議場やホテルなどを民間事業者が整備運営することになっているので、こうした施設を長い間継続的に運営するために、またこうした施設はどんどん新しいアトラクションやお店等を増やしていかないと他の地域との競合に負けることも懸念されますので、より魅力ある施設とするための投資をしていくために、安定した収入源として、厳しい規制と管理のもと、特別にカジノを合法化することになっています。

カジノの収入は全てが I R の維持と投資だけに使われるわけではなく、収益の 30% が国

と地方に半分ずつ納められ、公益のために活用されることとなっています。公益のために活用されている他のギャンブルといたしましては、宝くじ、競馬、競輪等があり、比較を下の表に取りまとめています。

続きまして、世界的にカジノはどれくらいの国で設置されているのかを示したものです。国によってギャンブルをめぐる事情が異なり、ちょっと古いデータですが、2013年の時点で世界201か国・地域のうち約6割の127か国・地域で合法化されています。入場料の徴収をするかしないか、ギャンブル依存症に対する従業員教育を義務付けているかどうかなど、国によって規制のあり方などは様々ですが、日本ではシンガポール、ラスベガスのあるアメリカのネバダ州などを参考にし、世界の中でも最も厳しい水準の規制を設けています。

続きまして9ページ目では、カジノにどのような規制が設けられるかを既存のギャンブル等と比較しています。例えば競馬、競輪などの公営競技のレース場などは全国で場所も限られており、中央競馬で10場、地方競馬で17場、またそれぞれ場外馬券場、ウインズなどもあります。またパチンコについては全国で1万店以上、北海道の中でも560店舗くらいと、かなり多く設置されています。一方IRは、法律で最大3か所までと決められています。また、商業施設、ホテル等を合わせたIR全体の総床面積に対し、カジノの床面積は3%以内と決められています。

また、競馬や競輪はオンラインで投票券を購入することが可能ですが、オンラインカジノは禁止されているほか、日本人等の入場にあたっては1日あたり6,000円の入場料が徴収され、回数制限も設けられています。

続きまして、IRができることによる懸念、課題の部分について説明させていただきます。

一つ目は、やはり多くの方々が心配しているギャンブル依存についてです。これまで日本になかったカジノという新しいギャンブルが解禁になることにより、ギャンブル依存の問題が発生するリスクがあることは事実として我々も認識しているところです。ただ、何も対策を取らずにカジノを解禁するのではなく、ギャンブル依存の心配、リスクを最小化するために、これまで日本では法律に基づいてギャンブル依存対策は行われていませんでしたが、IR整備法における入場制限などのカジノ規制に加えて、ギャンブル等依存症対策基本法に基づき、相談支援、予防教育など、既存のギャンブルを含めた総合的な依存症対策を進めることになっています。

一方、道ではIRの誘致はまだ判断していませんが、ギャンブル等依存症対策基本法に基づく推進計画の策定について検討を行っているところであり、自治体、医療機関、支援機関が連携し、総合的な依存症対策を執り行うよう準備を進めています。

続きまして11ページ目、カジノを解禁した国ではギャンブル依存症が増えているのかというデータです。なかなか定量的に比較できるデータはないのですが、きちんとした対策を取らなかったことにより、ギャンブル依存症が増えたり、社会問題になったりしたケースもあります。一方、日本がモデルとしているシンガポールでは、3年おきにギャンブル依存症に対する全国調査を行っています。シンガポールでは2010年に2か所IR施設が開業した

のですが、開業後、ギャンブル依存症の比率が減少傾向にあるという数字があります。この背景としては、I Rの導入を契機として、開業前からシンガポールの国自体が依存症の対策や専門のクリニックを設立するなどして包括的な対策をとっていることにより、その効果が現れたのではないかと考えています。

続きまして、海外でI Rがうまくいかなかった事例についてです。事例1、事例2と紹介しています。一つ目として、自国民が入場できるカジノを1か所に限定している国の事例です。この国では当初、ギャンブル依存症などの社会的影響対策が不十分だったことから、I Rの周辺に金融業や質屋などが次々と開業し、I Rに来たお客さんの中には車や貴金属を質入れする人や、帰る交通費もなくなるほどお金をつぎ込む人が増えるなど、依存症の問題や治安の悪化が問題となった事例があります。

続きまして、経営がうまくいかなかった事例です。カジノが建ち並ぶリゾート地として有名な地域ですが、当初その地域だけにカジノがあったのでお客さんも多く来ていたのですが、その後、周辺地域でも新しくカジノができたほか、エンターテインメントの開発などカジノ以外のお客さんと呼び込む取組が乏しかったことから、一時期倒産が相次いだ事例があります。こうした事例を踏まえ、仮に北海道にI Rを誘致する場合には、開業前に様々な影響を想定して対策を検討することが大切だと認識しています。

青少年の健全育成に対する影響、治安の悪化に対するご意見も多くお寄せいただいています。確かに昔の映画ではカジノイコールマフィア、反社会的勢力が牛耳っているというイメージがあり、治安に影響があるのではないかと心配されている方が多いかと思えます。I R整備法では反社会的勢力を排除するために、従業員はもちろん、株主や取引先にも背面調査を行い、反社会的勢力が入らない、健全な方々だけで経営していることを確認することになっています。カジノ施設への入場についても、マイナンバーカードを利用して本人を確認することにより、反社会的勢力が入場できないようにすることとしています。

また、青少年の健全育成に関する規制として、20歳未満のカジノ入場を禁止しているほか、広告看板を設置できる場所を国際線の到着ロビー等に限定するなど、青少年が普段の生活の中でカジノの広告を目にすることがないような対策が講じられています。

続きまして、北海道がI Rを誘致する場合にどのような課題があるのかを紹介したページです。釧路、留寿都、苫小牧の3自治体がI R誘致を表明され、この中で交通条件、収益面での期待等を考慮し、現在は苫小牧市の候補地を優先すべき候補地と整理しました。これらの地域は、ラムサール条約にも登録され、貴重な野生鳥獣等も繁殖しているウトナイ湖の上流部分にあたります。I Rを誘致する場合には、野生動物や周辺の自然環境に十分に配慮する必要があると考えています。また、北海道の観光の魅力としては、道外の方では自然環境やおいしい食に魅力を感じている方が多くいらっしゃいますので、こういったものと調和するような施設とすることが必要と考えています。

冒頭申し上げましたように、I Rに設置する国際会議場やホテルなどは、これまでの北海道にはないような、かなり大きな施設要件となっていますので、こうした施設が長期間にわ

たって運営できるように、どのような施設を整備したら良いのかという方向性を検討することが重要と考えています。

また、苫小牧の候補地は、現在森林となっており、上下水道、ガス、電気などのインフラ整備が整っていない状況ですので、仮に北海道に I R を誘致する場合には、こうした課題についても検討を進めていかなければならないと考えているところです。

以上、I R の期待される効果や課題などについて説明させていただきましたが、今の説明の内容や、普段 I R について思っていることなどについて、ご質問、ご意見等ございましたらお願いいたします。

〔ご意見・質疑等〕

(参加者 A)

この説明にあたって、ラスベガス、バーデン・バーデン、セントーサ、行かれたのですか？詳しく説明してくれたけれど。

(道担当者)

私も資料でしか見たことがなくて、行ったことはありません。

(参加者 A)

行ってないで説明している？ちょっと情けないですね。国の予算使って、道の予算使って、見たこともない、ただ聞いた話を僕たちにしても、ちょっと。

それと、過去データでものを言っていますよね。でも、これからつくるものは過去データが参考になるのかならないのか。なぜそれを言うかとなったときに、今、観光バスが動いていない。海外のお客さんがめっちゃ減っているのに。この前ニセコの方に行ったのだけど、路線バスは動いているけど観光バスは 30 台くらい止まった状態。知り合いにちょっと聞いたのだけど、観光バスも個人でやって廃業しているやつがめっちゃくちゃ増えているような状態。過去のデータと、今現在の状態でものをしてくれるのかと。

そしてプリンスホテルのテレビコマーシャルで、来年の 3 月 31 日までの宿泊予約をテレビで募集しているのですね。海外のキャンセルがめっちゃくちゃ出ているという状態です。それで、外国人どうのこうのという話ができるのか。それと、ロシアの問題、韓国、中国の問題、いっぱいあるじゃないですか。その観光客が減っている中で、どうやって外国人を増やすのか。何か秘策があるのでしょ？国とか道で考えている、増やす。そういうものがないと、人がいてやるならいいけど、つくったはいいけど来ないのじゃ、ちょっと。不思議に思うのですけど。

(道担当者)

貴重なご意見ありがとうございます。観光バスの運転手不足でしょうか、動かないというのは。お客さんがいないのか。

(参加者 A)

お客さんがいないの。

(道担当者)

確かに今、韓国人の方々が政治問題等で飛行機が運休になったり、お客さんが来なくなっている状況はあります。ただ私どもとしても、政治状況は政治状況として致し方ない部分がありますが、その中でも多くの韓国の方々に来ていただけるようにキャンペーンやPRを行いながら、お客さんに来てもらえるような努力をしていますし、またそれ以外の国々にも、中国、ヨーロッパ、アメリカ方面からもお客さんに来ていただけるように取組をしており、この冬には新しくオーストラリアと新千歳との直行便、また新千歳とフィンランドとの直行便もできますので、ある程度お客さんは増えるのではないかと期待しています。

I Rができた場合、お客さんが呼べるかご心配かと思いますが、これまで北海道の中では大きな国際会議、例えば数万人の方が集まれる会議は、会場がなく開催できなかった事情があります。今札幌市にあるコンベンションセンターは、国際会議場の定員が 2,500 人程度となっていますので、大きな会議場ができることによって、これまで道内で開催できなかった会議などを招致して、宿泊していただいたり、併せて観光していただいたりといった効果が期待できるのではないかと考えています。

また、仮に I Rを誘致する場合、どういった施設を整備するかはプロセスの中で事業者の方々と相談しながら決めていくこととなりますが、国際会議であれば海外からも多くの方々が来てくださいますので、北海道でしか楽しめないようなエンターテイメント施設などを整備することによって、国内、海外からもお客さんを招くことができるのではないかと期待されます。

(参加者 A)

過去にオーストラリアとニュージーランドで1週間カジノをやったことがあるのですが、オーストラリアにもニュージーランドにも原住民っているのですよね。カジノの会場のそばにいと、カジノで勝ったやつが金を投げてくるのですよね。北海道にもアイヌ民族の方々がいる中で、海外の人がそういったことをやってもいいものかどうか、そういうこともきちっと検討しなければならないし。人種差別以外の何物でもないから。俺たちはオーストラリアやニュージーランドで見たときには、ガイドに聞いたのだけど、やって良いものなのか悪いものなのか、この北海道でそういうものができて、差別的な、金くれてやるみたいなことされて、アイヌの人じゃないけど、腹が立つ部分ってあるのですよね。そういうことも問題点として考えてくれているのか。

(道担当者)

貴重なご見識ありがとうございました。そうした懸念もあることを十分踏まえまして、北海道にIRを誘致する場合には、十分対応を考える必要があると考えています。また、来年白老にウポポイという新しい博物館ができますので、IR施設がもしできましたら、当然うまく連携して相互にお客さんを活かすほか、IR事業者の方にもし北海道にIR施設を建てるとしたらどういったものを検討しますかと聞いている中では、北海道固有の文化に根ざした取組を進めたいとの話も伺っています。アイヌ文化は北海道が誇るべき非常に貴重な文化だと思いますので、そういった魅力を活かしながら、より多くのお客様を招くような取組にしたいと考えています。

(参加者A)

JTBの本社に知り合いがいて、北海道の観光事業の中で困ること、問題点はなんだと聞いたら、9月から2月の間、飛行機が飛ばない、吹雪で道路が使えない。その中で一番困るのは、海外から来たお客様のホテルを手配しなければならない。今日行くというのが行けない、そのときに遊ぶ場がない、これが一番困ると。リゾートでカジノができる、できないと言ったって、海外にはそんなものはあるからカジノに行くやつはいないし。

俺はニセコが近いのだけど、アウトドアスポーツのお客さんしか来ていないし、スーツ着ているやつなんか見たことはない。旅行代理店が言うには、スキップ観光、何かあっても埋め合わせできる、めぼしいものが欲しい。何か良い案ないかなとなったときに、たまたまアイスホッケーにつながりがあって、リンクを見たら6、7割の人しか入っていない。スキップ観光として、もし予定の所に行けないけど近くでアイスホッケーが見られると。日本ではアイスホッケーはローカルスポーツだけれど、海外ではメジャースポーツだから。ロシアのチームも韓国のチームも入っているし、今日ここへは行けなかったけどこういう試合がありますよ、と。チームとして、観光局を含めてスキップ観光に力を入れてくれるのならJTBも動くという話はしていました。

(道担当者)

貴重な情報ありがとうございました。IRはお客さんを閉じ込めるのではなく、今お話しいただいたようなアウトドアスポーツ、アイスホッケーやスキー場など、お客様のニーズに合わせていろんな施設を紹介して、案内ができるような送客機能も持たせることになっていきますので、IRを誘致する場合には、北海道内の各施設にお客様を循環させるよう取り組む必要があると思っています。

(参加者B)

民間事業者が施設整備して運営するといっていますよね。国や道との関わりと、民間事業

者との関わりがよく分からないのですけど。税金もかなりつぎ込まれて。

(道担当者)

I Rはあくまでも民間事業者が自らの資金で施設を整備・運営するものです。行政はいろんな方々の意見を伺うとともに、民間事業者のプロポーザルを受け、選定して、その後も民間の方々の提案の中でもっとこうしてくださいというような調整をしながら設置していくことになります。

(参加者B)

これだけの大規模施設であれば、民間の土地だけではまかないきれない部分もあるのではないですか。国や道の土地を払い下げるとか、そういったことは考えられていないのですか。

(道担当者)

苫小牧の候補地は民間企業が所有している土地です。

(参加者A)

仮に民間で建てた、うまくいかない、潰れました、その建物はだれが取り壊したり跡地を整備するのか、それまで全部予算で見ているのか。

(道担当者)

そこについては検討しているところです。仮にI Rを誘致する場合には、きちんと長期的な経営が成り立つように、I R事業者の提案内容についても、経営の持続性を踏まえて精査することになります。

(参加者A)

先のことって分からないじゃないですか。そうなった場合に、仮に建物を建ててこれを壊すときにどれくらいかかる、それを道や国が何かあったときの備えとして金を預かるというのも一つの手ですよ、それをやらないとおかしくなる。

(道担当者)

様々な方法があるかと思いますが、今後誘致するとなった場合には課題として取り組んでいきたいと思っています。

(参加者A)

過去、苫小牧にそういう建物があったんだ。20年もずっと鉄骨のまま町の中に。そうい

うのを見ていると、最後の責任までとれるような状況でやってもらわないと。

(道担当者)

課題の一つとして十分認識して取り組ませていただきます。

(参加者C)

今北海道って、世界遺産だとか自然を一つの売りにしている部分があるじゃないですか。一方でIR、リゾートでまた主導権を取ろうとしているじゃないですか。指針としてどっちを道としては考えているのですか。

(道担当者)

アウトドアや自然を知っていただくきっかけとしても、IR施設を活用できるのではないかと考えています。せっかく北海道の魅力としてそれを目当てに来てくださっている方も多いので、誘致するとなれば自然環境には十分配慮して取り組みたいと思っています。

(参加者C)

過去にこういった大箱を作って失敗した例ってたくさんあるじゃないですか。芦別の展示もそうだし、函館恵山のモンテローザもそうだし、作り物って結局何年か後にはそういった状態になっている。それは事実としてはありますよね。一方、自然のものはずっと引き続き観光資源として残っていますよね。どっちに指針を置くかということ、道としてしっかり持つべきだし、目先のことでこういうものに手を出して、結局あとは知らないよという話になると、北海道内に至るところに、朽ち果てた建物はありますよね。道の駅にも近いあちこちに。愛別の道の駅なんて、何でこんな所にあるのだらうと思うようなところで、道路だけは違うところにどんどんできて、どんどん人が違うところに走るとか、そういう指針のなさで、目先のことで動き出して結局失敗しているのが今の道の行政じゃないかと僕は思うのですよ、正直な話。この問題もしかりだし。

この問題は、一つは日本国民の施設として求められるものと、外国人が来て使う施設の二軸があると思うのです。日本人は結構熱しやすく冷めやすい。ぱっと行って結局何年も続かないで放り出される感じ。一方で外国人の方が来たら、今回のラグビーもそうだけど、全くモラルが違う、生き方や文化が違う人たちがいきなり来て、周りの人たちにかける迷惑みたいなところ、その辺をどううまくやっていけるのか、正直そういう心配はありますね。

(道担当者)

確かに今おっしゃいましたとおり、施設を継続して運営していけるのかについては私も課題として認識しています。IRを誘致するとすれば継続して運営できるよう、例えば30年くらい経つ東京ディズニーリゾートは新しいアトラクションやコンテンツメニューを

変えながら、未だに多くのお客さんを集めている施設ですので、そういった事例を見習いながら、継続的にお客さんを呼べるような施設にしなければいけない、でなければ営業面で行き詰まってしまうというのは私どもも認識していますので、もし誘致するとした場合には十分に施設整備も検討していかなければならないと考えています。

(参加者 A)

観光のあり方というのは、道路から立って見るか、船から見るか。ものを見る位置が同じだと、さほど感動することもないけれど、50人とか90人乗れる飛行船があれば、上空350メートルから600メートルで見られるのです。その夢を持ったときに、飛行船を北海道で飛ばせないかと国交省に電話したのですね。調べたら、後志管内は飛ばせる。海の方から積丹の断崖絶壁を見るときか、羊蹄山を一周するなんてことはできます。国交省の人がびっくりして言うには、「ものを見る目が変われば、観光が変わるかもね」と。上空のいろんな角度から、あそこがきれいだ、行ってみたい、じゃあ次の日そこに行こうか、という観光ができるから案外おもしろいですよね。

(道担当者)

一時期「白い恋人」のパッケージになっていましたけれど、日高山脈にハート型の豊似湖という湖があり、あそこは確かに上からでなければ見えないのですよね。視点を変えることによって価値やおもしろさに気づくこともあると思いますので、参考にさせていただきたいと思います。

(参加者 A)

本当に自分たちの住んでいるところの上空360mで見られたら気持ちいいだろうなど。産業だって地場産業が盛り上がる、新しいものをつくるのではなくて地場産業を盛り上げる。そういう観点に立って動けるのではないかなって。

(参加者 D)

説明いただいた中で、道として、カジノの税収等の部分と全体的な説明でいくと、前向きな方向でお考えになっているのかなと読み取れているのですが、気になっているのが自然を活かしたIRをお考えでらっしゃると。そのために滞在型でありつつも、道内の観光産業への波及効果も狙っていらっしゃる。ただ私が危惧するのは、距離感が他の地域とは違って、苫小牧のアクセスは比較的、道北の方が遠くなると思うのですが、そういった面でどういう方が滞在されて、どこまで足を運んでいただけるのかです。千歳空港が近いので航空機を使って旅行をするのか。他の地域での例があるのかどうかはまず一点。

税収のことを考えるときに、いろんな制限をかけながらギャンブル依存にいかないようにという趣旨は非常に大事だなと思うところと、逆に人を集めるための入場料が6,000円

となると、非常に限定的になっていって、そこへの集約が小さくなっていくという懸念。それと大きな会議場も必要だと思うのですが、利便性を考えると札幌より他の地域となったときに、これだけの規模が維持できるのかという不安があって、もし道の方でマイナスイメージを持っていらして、ここは非常に難しい課題だということがあれば教えてほしいです。

(道担当者)

例えば、空港民営化などの取組と連動しながら北海道の各地域にお客さんを送れるような仕組みを検討する必要があると考えているところです。

(参加者D)

点と点になってしまうので、北海道の魅力って線の中にいっぱいあるのかなと思うのですが、その発掘がなかなか難しいのだろうなと思っていました。

(道担当者)

一つの考え方として、苫小牧を始点終点とするミニツアーみたいなもので、例えば道東地域を周遊してまたこちらに戻って千歳空港から出ていただく、あるいは空港民営化の中でうまく連動できればIRから出て、道東を周遊して帰りは女満別空港から道外に帰るといった仕組みもあるかと思います。仮に誘致するとなった場合には、空港民営化という新しい動きとしっかりタグを組んで進めたいと考えています。

(以上)